

『空手美少女高菜』

ビーチに君臨する迷惑パーティーピープルを

女子空手部員が全裸引き回しの上金責め制裁！

【玉責め】 【CFNM】 【短小責め】 【逆レイプ】

1章 ビーチはピープルのもの……なわけがない

大勢の若者でにぎわう砂浜。

そこで一際大声で騒ぐ若い男たち。

引き締まった体を海パンだけで隠し、焼肉に興じている。

しつつ、周りを見て、良さそうな女がいるとすぐに声をかけていた。

人数は二十人ほどで、そうそう都合よく女が集まっても来ない。

だが、すぐにそろうと信じて疑っていない感じだった。

——パーティーピープルって奴か。

ボリボリと、むき出しの腹を無造作に搔く少女。

長身黒髪、眠そうな目付きで、胸は結構なボリューム。

まず美少女と言っていい。

スラッとした体とあいまって、モデル系の美少女といったところか。

北山高菜。

かの有名なイケメン戦国武将北山輔清の子孫だった。

といっても、輔清の子孫は相当数いる、彼女の家は傍流といえる。

傍流というか、ぶっちゃけた話「伝、北山輔清の末裔」という普通の家だ。

本当にそうかな、などと考えるほど、数百年前の先祖になど高菜は興味がなかった。

空手のほかには、さほどこれといった興味を持たない少女だ。

うさぎ女子高の空手部主将。

一様彼氏はいるが、普段はほとんど冷め切っていた他人同然。

ただ、相手が浮気をしたときだけ猛然と激怒し、制裁を加えるという歪んだ関係。

ピープル連中が四人の男女に声をかける。

気の弱そうな男二人に何だかんだ言って4、5人集まって押しのけ、女を横取りしようとしているようだった。

逃げる四人に、罵詈雑言浴びせている。

周りはいやな目を向けるが、体格のいい男たちばかり二十人ほども徒党を組み、他人を尊重する様子など微塵も見せないのでは誰も文句など言えない。

子供にさえ、何を見ている、と怒鳴りつけるのでは救いがない。

——パーティーピープルか、クソだな。

個人の感想です。

——ああいう手合いはどこに行っても、自分たちが中心にいていいと思ってやがる。他人を押しつけ、一番楽しい場所に居座って徒党を組んで周囲をニタニタ威圧し、嫌な扱いを受けない立場を整えてから好き勝手女に声をかける、それならある程度は女も寄ってくるだろうよ。

——ああいう手合いはどこに行っても、自分たちが中心にいていいと思ってやがる。他人を押しつけ、一番楽しい場所に居座って徒党を組んで周囲をニタニタ威圧し、嫌な扱いを受けない立場を整えてから好き勝手女に声をかける、それならある程度は女も寄ってくるだろうよ。



「先輩、どうしたんですう？」



「先輩、どうしたんですう？」

間延びした声。

うさ女の後輩、空手部員。そして高菜が幼い頃から通っている空手道場の娘。

金城海子。

白のセパレートの高菜と違い、マニアに馬鹿受けのスクール水着姿。

しかも、その肢体は肢体と呼んでいいのか、遠目には小〇生だった。

モデル体型といえる高菜と並ぶと余計に幼く見える。

が、れっきとした高校生だった。

チラ、とその小〇生風味の高校生が先輩の目線の先を見る。

——うわ、なにしてるんですかあの人たち？ まさか、女の子を横取り？ まずいですう。あんなの見たら、高菜先輩……

高菜は、黙って立っていた。

と、それに手を振るピープルの一人。

「ねえ君、一緒に遊ばない？ 俺そこのグループの人間でさ、俺と一緒にならそこには入れるよ」
駆け寄ってくる。

背の高い男。

自分たちと一緒に遊ばせて上げる、というような上から目線のことを言いつつ、笑いかける。

「俺、HA J I MEっていうんだ。D J！ D Jなんだ、どう思う？」

D Jだといえば女の多くが興味を持ってくれると思って疑わない様子のハジメ。

そのハジメが、高菜の目線に気づく。

——なんだこの子！ 俺の股間見てるじゃん！

注・彼は病人ではありません。

実際、高菜は彼の股間を見ていた。

海パンに包まれたふくらみを。

それに気づき、海子は唾を飲む。

彼女は、後輩としてよく分かっていた。

高菜がなぜ男の股間を見ているのか。

それはもちろん、入れてほしいなどという理由ではない。

彼女は、そっちのほうは見向きもしない。

彼女が興味があるのは、その下。

双子の肉玉だけだ。

「ね、いいでしょ？ 言いたくないけど、俺たち結構怖い知り合いも多いんだ。仲良くしておいた方が君にとっても得だよ？」

ニヤリ、と腐った笑みを浮かべるピープル。

「俺たちこの通り鍛えてるから、近くにいる女の子なら守れるけど、誘い断った子達は守れないから、何かあっても何にもしてあげられないんだ」

小さくため息をつく海子。

——これ最低というより脅迫ですう。これは高菜先輩がやっちゃっても仕方ない事例ですねえ。

周りを見る。

他のピープルは、まだ美少女二人に気づいていないようだった。

その、モデル系美少女が笑う。

視界の端で、男の股間のふくらみの、下の辺りを見ながら。

「遊ぶか、それもいいな」

ぼん、と肩を叩く。

そしてゴリュ。

男の頭の中で、聞いた事もない音が響く。

「ぬんぐうう」

唇を噛み、腹の底からのうめき声を出す。

下を見る男。

見なくても、何が起こったのか大体わかっていた。

男として、わからざるをえない。

膝だ。

ほっそりとして、しかし肉付きはいい高菜の長い脚。

それが跳ね上がり、膝蹴り。

男の肉玉を、嫌な音を立てて持ち上げていた。

情け無用、命無用の膝金蹴りだった。

横目でそれを見ながら、海子が頬を引きつらせる。

——今なんか、ゴリユって音こっちにも聞こえたですう……マジ手加減なしですう、高菜先輩。

まあ、やられて当然の言動ではあった。

それに、この時代ナノテクで肉玉が潰れても一日で治る。

だからいいだろうと、女の高菜はわりと軽く考えていた——この時期の女は多かれ少なかれそういう感覚はあるが、高菜の軽さは凶抜けている。

砂浜に膝を突き、何もいえない男を見下ろして高菜が熱い息を吐く。

「いい表情だなあ……なんだ、結構いい男じゃないか」

「ぐぬううう」

——何しやがる、この女……キ○タマを……キ○タマをいきなり蹴るなんて人間のやることじゃねえ。これだから女は人間じゃねえんだ……ただやるだけの対象、それがよりによって俺のキ○タマ…

ハジメの頬に手を触れる高菜。涎が垂れないように、唇を舐める。

「いいな、鍛えた体の男が、華奢な女にキ○タマを一発蹴られて身動きできなくなる屈辱と苦痛に震える姿。……ふふ、周りに人がいるのが恨めしいな」

——いなかったら何する気ですか？

かなりじっとりとした目を向ける海子。

股間を押さえるハジメ。

その手をグリグリと踏みつける。

「や、やめ……」

「ふふ、いい表情だ。男性器を踏みつけられる男の表情、悔しさ、恥ずかしさ……怒り、悲しみ、ない交ぜになった……本当に、いいよな。な？」

頬を赤らめ、甘い息をつきながら横の海子を見る。

「はあ……」

一欠けらも同意していない様子の海子だが、まったくその反応を気にした様子もない高菜。

そのまま、手をどけて金蹴り二度目、とは行かない。

——流石に、この程度の成り行きでそれはやりすぎだからな。

思ったより正気の高菜は、ハジメに背を向ける。

——今は時間もないし。

時間があればどうだったのか、背筋が寒くなることを考える高菜だった。

「高菜先輩、もう行くですう」

不用意、といえぱ不用意だ。ハジメが聞いている所で名前を呼ぶというのは。

ハジメが、高菜を見る。

名前と顔を覚えた、という感じだ。

高菜がちらりとそれを見る。

——なんだ、私の顔と名前を覚えたか？ いいだろう、復讐に来るがいい。いい金潰しのラッキーチャンスだ。

そんな内心などおくびにも出さず、ハジメに形のいい尻肉を向ける。

「それじゃ、いくか」

「みんな集まってるでしょうし」

「突然だが、いいか？」

「なんですか？」

「お前は私にとって、ロ〇ってところだな」

「本当に突然ですねえ……じゃあ先輩はア〇ラ先輩のつもりなんですか？」

「もちろんそうだ」

「まったくわけのわからない話ですねえ……っていうかその伏字ってどうなんでしょうか」

無意味すぎる話をしている間に、同じような水着の女子〇生が集まっている一角にやってくる。

うさぎ女子高空手部は、今この近くの海の家に合宿に来ていた。

一定時間店を手伝う代わりに宿代をただにしてもらおうという条件だ。

「みんな集まったな、それじゃ練習開始だ」

並んで、礼をする。

二十人ほどの空手部員。

ある程度の形はできているが、それほど強いという感じはしない。

「かあっ！」

二十人に相対して、高菜。

何の変哲もない正拳突きだが、パンと空気を裂く音がする。

同じように正拳を放つ少女たちの中で、同じように乾いた音が鳴るのは海子だけだった。

二人の技量だけが卓越しているのがわかる。

別に、他の部員も弱くはない、まじめに空手をやっていることはなんとなくわかった。

周りの、特に男たちの目が集中する。

特に注目を浴びるのは高菜だ。

彼女が拳を振るたびに、スイカというほどではないが、肉メロンがブルンブルンとそれ自体殺傷力でもありそうな勢いで揺れる揺れる。

中高生ぐらいの男たちが次々と前かがみになる。

高菜だけではなく、水着姿の健康そうな少女らの姿には目を釘付けにされざるをえない。

というか、海子以外の子らは皆高菜ほどではないが縦横にブルブルンと肉丘を揺らしているのだ。
このオッパイ揺らしの鍛錬も海の家近くで行っている。

このオッパイちゃんたちが店員を勤めます、という宣伝になる。

宿代がただになるというのもあるが、OBの旦那が海の家を経営者であることもこれだけサービスする理由の一つだった。

「ふう、あついな……」

言いつつ、一旦正拳や蹴りの動きをやめ、首にかけていたタオルで体を拭く高菜。

拭きつつ、ブラジャーに少し触れるのに気づいたものはいない。

「よし、再開するか」

——誰に言ってるんです？

下級生なので少しはなれた所の海子が前蹴りをしつつ、内心首をかしげる。

「はっ、あ」
ブルン。

高菜の鋭い正拳突きによって肉メロンが普段よりさらに大きく揺れると同時に、ブラがはじけ飛ぶ。
「きゃあ！」
叫び、両手を挙げる。
そして一瞬後、体を抱えてしゃがみこむ。
注目の的のモデル系美少女のポロリに、
周辺の男たちは目の色を変え、
場は沸騰する。



「はっ、あ」

ブルン。

高菜の鋭い正拳突きによって肉メロンが普段よりさらに大きく揺れると同時に、ブラがはじけ飛ぶ。

「きゃあ！」

叫び、両手を挙げる。

そして一瞬後、体を抱えてしゃがみこむ。

注目の的のモデル系美少女のポロリに、周辺の男たちは目の色を変え、場は沸騰する。

「しゅ、主将！」

慌てて駆け寄る部員たち。

「いや、大丈夫だ」

顔を真っ赤にして言う高菜。

——このポロリでさらに客が増えるだろう。

内心、腹黒い笑みを浮かべる高菜。

と、その騒ぎが、別の方向性を帯びる。

何か、揉め事が端のほうで起こっているような感じだ。

演技をしていない海子は、いち早くそれに気づく。

「先輩、ピープルですう！」

「ぬ？」

オッパイ丸出しになっちゃって恥ずかしいの！ という設定で真っ赤になっている少女とは思えないおっさんのような返事をしつつ、高菜は騒ぎのほうを見る。

「今のポロリ女だ！」

ハジメ。

高菜の金的蹴りで地獄級の苦しみを味わったものの、しばらく休んで復活していた。

空手部のデモンストレーションのなかに高菜がいると思ったわけではない。

面白いイベントがあれば、中心に割り込んで行こうという図々しさに過ぎない。

そこで偶然、危うく肉玉消滅の危機に陥れてくれた女の姿を見出し、仲間たちに仕返しを手伝うように頼んだのだった。

「ハジメ、マジであんな子に？」

「マジだよ！ 女になるところだぜ！」

ナノテクで玉は治るんだからいいだろう、とはピープルの男たちは誰一人言わない。

男なら当然の反応といえた。

バラバラと、二十人ほどのパーティーピープルたちが同じぐらいの数の女子空手部員の前に並んでいく。

見合いとも、戦う準備とも取れる微妙な感じだ。

高菜の前に立つのは、一際体格がいい男。

「お前ら、仲間に面白いことしてくれたな」

「お前ら、いい体してるな」

高菜。

ギョツとなるピープルたち。

両手を腰に当て、突き出す高菜。

その高圧的な姿勢はまあいいのだ。

だが、少女がオッパイ丸出しでその格好はどうかしている。

ブラが飛んだことを忘れていたのだろうとは思うピープルリーダー。

——忘れるか普通？ 女の子がブラジャー飛んだことを？

一際体格がいい。

ハーフで、一時芸能界からの誘いも来たがマネージャーを殴ってパーになったという逸話を持つ男。

憲次という名だが、ケンと呼ばれていた。

「ケン、いいからやっちまおうぜ」

「ん、ああ」

ケン、少女らをおちのめそうという大人の男は普通中々考えないことを薦めまくるハジメを見て、多少引いた。

——こいつよっぽどキ○タマ痛かったんだな。当たり前か。キ○タマなんだから。

「お前ら、うさ女の女だって？」

「空手部だ。見てわからないか？」

言いながら、ケンの海パンの前を凝視する高菜。

——こいつどこ見てんだ？

ケンは、高菜が自分の男の部分を見ている事に恐怖すら覚える。

ハジメの話を聞いていなければまだしも、彼の話を聞き、揉めている状態ではどう考えても**肉玉攻撃のために見ている**としか考えられない。

高菜は首をかしげる。

——もしかしてこいつハーフか何かか？ それっぽいな。もしかしたらキ○タマデカイかもしれない。蹴りがいありそうだ。

「お前、なんていうか……俺のキ○タマ見てないか？」

「ふふ、私にとってキ○タマは二種類」

ケンの股間を指差す高菜。

「潰していいキ○タマと、そうでないキ○タマ。これは前者だ」

「さてえっ！ 何でこの流れで潰していいんだよ？！」

「あ、そうだな。勘違いさせてしまった。何も私は、是が非でも去勢するといっているわけじゃない」

特に笑いもせず、真顔の高菜。

大体、無表情が普段の顔である。

「これからの喧嘩で全力で蹴り潰しに行っ、結果潰れても構わないと思っているだけだ」

ざわ。

流石のピープルたちもお互い顔を見合わせる。

女など二三人束になってきても蹴散らせるつもりだ。

だが男として、そんな集中的に急所を狙ってくる相手と戦いたいわけがない。

男同士ならお互い狙いあうよりは多少紳士協定もありうる。

だが相手が女となれば、ついていないからには男になら期待できる最低限の情けもありえないのではないか。

が、ケンが手を挙げる。

「はったりだ、そんな無茶なことはしてこない！」

「そうだ。お前ら安心しろ。私は、お前らに一つ提案する」

高菜が、部員とピープルを交互に見る。

「人数は同じぐらいだ。だから乱○をしよう」

「え？」

高菜の発音がわかりにくかったので、素で聞き返すケン。

「乱組をしよう」

「ああ……なんだ」

ガッカリした顔。

「もしお前たちが勝てば、遊んでやるぞ」

「マジかよ……じゃあ乱組の後は乱交ってことか……聞いたなお前ら！」

歓声を上げるピープルたち。

と、周りで盛り上がる者たちもいた。

ピープルになんとか付いてきたというか引き寄せられてきた、似たような軽い女たちだ。

四十人ぐらいはいる。

皆、かなり布の少ないビキニで、スタイルもいい。

ハジメが彼女らの騒ぎに顔を輝かせる。

——おお、これだよこれ！　これが俺たちピープルにふさわしい状況！　美女に囲まれ、楽しい人生を送るってわけ！　キ〇タマ蹴られて転がるのはモテない奴の仕事！

ハジメは普通の男女を押しつけ、周りで騒ぎ出した軽い女たちに勇気付けられる。

まだ、高菜に蹴られた肉玉は痛む。

が、もう気にせず、若いのと鍛えられていることで見ているだけで反応してしまうような水着の少女たちに向き直る。

といっても、また肉玉をやられてはかなわない。

——俺は楽しせてもらうぜ。

目をつけていた一人に声をかける。

多少小柄な子も多いが、一人だけ群を抜いて小柄な子がいたのだ。

これといった理由もなく青い髪をした少女。

「あんた、俺とやってくれるか？」

「いいですよお」

敵の中で桁違いに強い二人のうち、ナンバーツーに声をかけた勇気のありすぎるハジメ。

海子と戦い始めたハジメを皮切りに、三々五々乱組みが始まる。

鍛えているとはいえ、中々女子〇生の空手など大の大人にはあまり通じない。

「おごっ！」

スパン、と軽い音を立てる高菜。

横で、別の部員と向き合っていたピープルを蹴る。

さて、ここで問題。

彼女はピープルのどこを蹴ったのでしょうか？

答えは意外な事に……肉玉だった。

それを目の端で見っていた海子は内心引いた。高菜相手にはよくあることだが。

——うわ、あんな弱そうな人のキ〇タマを、それも横から狙い撃ちって半端ないですう。

まだ、正面から打つ形なのでました。

膝を突き、転がるピープル。

やっと倒した。

とは、三人は思わない。

その脚を掴み、さらに引っ張る三人。

「まだ油断できないよ！」

いや、もう結構真剣に死に掛けではないかと思える。

その股間に、足の裏を押し付ける。

「おらおらっ！ キ〇タマ潰れる！」

「おらおらっ！ キ〇タマ潰れる！」
「おぎやあああああああああああああ！」
ゴスゴスゴスゴスと、容赦なく、
男の部分を踏み潰す空手少女。



大して強くはないからこそ、
容赦や加減がまったくくない。
しかも女でもある。
「どう？」
「うごかないけど、キ〇タマ蹴られたぐらいで
本当にそんなに痛いかわからないし」
「じゃあもうちょっと蹴っとうか！」

「おぎやあああああああああああああ！」

ゴスゴスゴスゴスと、容赦なく男の部分を踏み潰す空手少女。

大して強くはないからこそ、容赦や加減がまったくくない。

しかも女でもある。

「どう？」

「うごかないけど、キ〇タマ蹴られたぐらいで本当にそんなに痛いかわからないし」

「じゃあもうちょっと蹴っとうか！」

こんな光景は一つではなかった。

早々にハジメの顎を打ち抜き、倒れる所に爪先金蹴りを食らわした海子も——彼女も高菜のことをいえない程度に容赦がないが、高菜と違って金責めを楽しんでいるわけではない——他の仲間たちを助けて回っていた。

大の男を手早く戦闘不能にするには、やはり狙うべき場所の一つ。

次々、急所攻撃で男たちに涙を流させる小〇生風少女。

異様な光景だが、それが目立つような上品な場でもなかった。

「おらおら！ 金潰し！」

「こんな弱点ぶら下げていばってんなよ！」

「そのままキ〇タマ潰しちやえ！」

高菜と海子の活躍で、二体一三対一でピープルたちを圧倒する空手少女たち。

さほど強くもないだけに、彼女らは余計に執拗に急所攻撃を行い、気づけば股間を押さえて倒れていないピープルはリーダーのケンだけになっていた。

メインディッシュの前で、拳を鳴らす高菜。

「待たせたな」

「ま、待ってくれ……もう十分だろ？」

ヘラ、と気の抜けた笑いを見せるケン。

それを、少し遠巻きに空手少女らが囲む。

「何いってんのよ！」

「そうよ、いい年した大人の男が、女の子相手に暴力でなんとかしようとして！」

「負けたらもういい？ オメーのキ〇タマ潰すまでよくないっての！」

「もう玉潰ししかないわ！」

勝つために散々急所攻撃をしてきた少女たちは、今や男の泣き所への攻撃に酔っていた。

圧倒的に強く、頑強な男たちが自分たちの華奢な腕や脚によるそこへの一撃で一発で膝を突き、泣いて転げまわる。

その姿に、高菜ほどではないが嗜虐心を引き起こされていた。

膝を閉じ、悩ましそうに腰を動かしている少女もいた。

その周りを囲む水着の女たちは静まり返っていた。

悪い男が好き、というタイプの女たち。

彼女らにとって、頭一つ低い少女たちに暴力で負けるなど男の資格を失うほどの出来事である。

が、彼女らも実際の所よく分からないとはいえ、男の急所のことは知っている。

「ねえどうする？」

「あいつらもういいか」

「でもキ〇タマやられたんじゃああなるのもしかたないかも」

「うーん、じゃあ回収する？ 基本かっこいいしねえ、まあかなーり減点だけど」

「いや、キ〇タマは仕方ないっしょ。私だって五歳のときに二十の兄貴のキ〇タマ蹴って泣かせてるし」

「五歳の妹に泣かされる二十の兄貴って！」

ピープルたちを無視して盛り上がる彼らの「ファン」の女たち。

「もう金蹴りはやられたくないか？」

「も、もちろん。なんなら、へへへ、金でも……」

「金はいらん。その代わり条件がある……」

ニコリ、と珍しく笑う高菜。

——あれ、絶対どSイベント考えてるですう……

横に立つ海子に嫌な確信を抱かせながら、彼女の予想も期待も裏切らない高菜が、何とか座る気力ぐらいは回復しつつあるピープルたちを見回しながら言う。

「この辺で許してやるから、これからお前らだけでヌーディストビーチをやれ」

それは許すといえるのだろうか？

ともかく、どS高菜ちゃんの要望により、砂浜での乱闘が突如CFNM展開に突入するのだった。

「っていうか高菜先輩」

「警察が来たらこいつらが勝手に脱いだと言おう」

「そうじゃなくて、いい加減これつけるですう」

「ああ、うっかりしておったわ」

「うっかりでオッパイ丸出しを忘れる女子〇生ってなんなんですかねえ……」

呆れるしかない海子。

体験版終わり

気に入っていただけましたか？

この後は全裸引き回しのCFNMに、復讐レイプ失敗からの金潰し逆レイプとなります。

よろしければ、続きは製品版でお楽しみください